『日本語学論集』第１３号　２０１７年３月

原因・理由を表す「おかげで」の成立について

馬　紹 華

1　はじめに

日本語における原因・理由を表す諸形式の中、事態の望ましさによって使い分けるものがある。たとえば、「おかげで」は望ましい事態の原因・理由を示すのに対して、「せいで」は望ましくない事態の原因・理由を示すことが一般的である。一方、三浦（2007）では「「おかげで」が用いられる文において、後件事態にマイナス性がみられる」と述べたように、望ましくない結果の原因・理由に「おかげで」が用いられることはあるが、逆に望ましい事態の原因・理由に「せいで」が用いられることは殆どない。

（1）a　あなたが来てくれたおかげで、楽しい会になりました。
　　b　映画の開始時間を間違えたせいで、見ることができなかった。
　　c　君に頼んだおかげでかえってややこしいことになってしまった。
　　d#保険に入っていたせいで、病気になった時に手術ができた。

（1）a、b は「おかげで」と「せいで」の本来の望ましい事態の原因・理由と望ましくない事態の原因・理由の用法である。（1）c は好ましくない結果であるにもかかわらず、「おかげで」が皮肉的に用いられるが、（1）d は好ましい結果であるため「せいで」は用いられない。また、「おかげで」の場合は望ましい事態の原因・理由を示すほか、人の力添えや神仏の助けなどに対して恩恵を表すこともできる。たとえば、文頭に来る「おかげで」（「おかげさまで」の形が多い）は他人の助力や恩恵に対して感謝の意が込められる表現となる。ただし、そういった助力や恩恵がはっきり存在しない場合でも、「おかげ（さま）で」が挨拶的に用いられることも屡々見られる。

（2）a（医者に対して）「おかげさまで、息子のけがはだいぶ良くなりました。」
　　b（お見舞いの人に対して）「おかげさまで、息子のけがはだいぶ良くなりまし

た。」

（2）a の「おかげさま」は息子の怪我を治療してくれたことに対して感謝の気持ちを表明し、（2）b の「おかげさま」は息子の怪我を見舞いに来てくれたことに対して感謝の意を表明するものである。前者の場合は医者から確実に恩恵を受けるが、後者の場合は恩恵関係が薄く、他人から親切を受けることとなる。この二文において、「おかげさま」は一種の挨拶表現のように用いられていると見られる。

以上、対となる「おかげで」と「せいで」の意味用法は単純のように思われるが、実際には「せいで」に比べ「おかげで」のほうが様々な展開が見られる。筆者はこれまでに「せいで」の原因・理由用法の成立について考察しており（馬（2017））、本稿では「おかげで」の原因・理由用法の成立及び展開について考察する。

2　上代～中古の「かげ」

「おかげで」の語源となる「かげ」は上代から「蔭」「陰」「影」などの様々な語形を持つ[1]。これにより「かげ」は上代日本語において、「花や木のかげ（光を遮って物体の背後にできる薄暗い部分）」「陽の当らない所（覆い隠された光の当らない部分）」「姿（水・鏡に写る姿など）」「光」の意味が見られる。

（3）a　橘のかげ踏む道の〔蔭履路乃〕八衢に物をそ思ふ妹に逢はずして（万葉集巻二・125）…木のかげ

b　奥山の岩陰に生ふる〔磐影尓生流〕菅の根のねもころ我も相思はざれや（万葉集巻四・791）…陽の当らない所

c　かはづ鳴く神奈備川にかげ見えて〔陰所見而〕今か咲くらむ山吹の花（万葉集巻八・1435）…姿

d　木の間より移ろふ月のかげを惜しみ〔移歴月之影惜〕立ちもとほるにさ夜更けにけり（万葉集巻十・2821）　…光

このほか、中古の「かげ」に身分や地位の高い貴人から「庇護」を受けることを意味ものがある。この場合、用例（4）のように「頼むかげ」や「かげに隠れる」「かしこき

1　『日本国語大辞典　第二版』（小学館）では、「かげ」の様々な語形の意味について次のように説明している。

【蔭】（イン）草や木のかげ。「緑陰」転じて、おかげ。助け。また、おおう。隠す。かばう。【陰】（イン・オン）陽の当たらない所。ひかげ。「陰影」かげる。くもる。転じて、暗い。湿っぽい。うっとうしい。【影】（エイ）ひかり。「月影」転じて、ひかりが遮られてできた暗部。「陰影」また、かげぼうし。すがた。かたち。

おかげ」といった固定的な形で用いられることが特徴的にである。

(4) a　わび人のわきたて立ち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり〔自ら好んで身を寄せた木陰なのだが、風雨を防いでくれるものがなく、紅葉が散っていたことよ〕(古今和歌集巻五・905 年・292)

b　…人々は　おのが散り散り　別れなば　頼むかげなく　なりはてて…〔仲間の女房たちが秋のもみじ葉のようにめいめい散り散りに別れ散ってしまえば、後には頼みになる木陰ひとつないものとなりましょう〕(古今和歌集巻十九・905 年・1006)

c　かしこき御蔭をば頼みきこえながら〔もったいない帝のご庇護におすがり申してはいながらも〕、おとしめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。(源氏物語桐壺・1008 年・20)

d　いといみじう心細き御ありさま、ただこの御蔭に隠れて過ぐいたまへる年月〔源氏の御庇護のもとに過している長い年月のことや〕、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿の内いとかすかなり。(源氏物語須磨・1008 年・174)

e　「さばかりにほひうつくしかりしかたちに、物を、いみじう思ひみだれて、世をすて給へる親の御かげにかくれて〔出家なさった親の庇護に隠れてお暮しになり〕、いかばかり心ぼそく、かなしかるらむ」、(夜の寝覚・1050−1053 年・176)

f　年ごろ天照御神を念じ奉れと見ゆる夢は、人の御乳母して内わたりにあり、帝きさきの御かげに隠るべきさまをのみ〔帝や后の御庇護を受ける身となるのだとばかり〕夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。(更級日記・1059 年・511)

これらの「かげ」はいずれも「庇護」の意味を表している。たとえば、『源氏物語』の用例で言うと、(4) c は「(更衣は) 帝の庇護を受けながら、……自身も病弱で気苦労の日々でいらっしゃる」ということであり、(4) d は「(女御は) 源氏の庇護のもとに過している長い年月のこと……が自然に思いやられて、邸内はまことにひっそりとしている」ということである。ほかの用例も同様に「庇護」の意味だと見られる。

この「庇護」の意味は「寄らば大樹の陰」という表現があるように、樹木の繁茂と一族の繁栄をしばしば重ね合わせるところから派生したと考えられる。つまり、繁茂した樹木や花のかげに身を寄せる行為を力・権力のある貴人の保護のもとに居ることに喩え

られ、そこから「庇護」の意味が派生したと考えられる[2]。たとえば、(4) a、b の二例はいずれも紅葉が散ってしまったことを（貴人の死により）庇護がなくなったことに譬えている。(4) a は常康親王の死、(4) b は七条后の死を指す。

「庇護」を求めるために樹木や花のかげに身を寄せるというのは隠れることでもあり、よってこの意味を表す「かげ」は「隠れる」という述語と共起することが多い（(4) d～f を参照)。そのほか、「頼むかげ」や「かしこきおかげ」は頼りとなる庇護や高貴な身分であることを示すため、こういった表現も多い。「庇護」という行為は人を護る、庇うことを意味し、庇護する側は受ける側より身分が上位であることが容易に想定できる。従って、用例 (4) のように「かげ」に「御」が付くことが少なくない。

なお、古代語「かげ」の諸用法のうち、この「庇護」の意味が後世の「おかげで」の意味形成に最も関係があると考えられる。これについて時代順に考察していくが、ここでは古代語における「かげ」の意義ごとの用例数を表 1 に示す[3]。

成立年代	作品名	木・岩などのかげ	光	姿	庇護
759年以後	万葉集	20	20	24	—
935	土佐日記	—	2	3	—
951	大和物語	2	1	8	1
956	伊勢物語	2	2	1	—
974	蜻蛉日記	11	8	9	—
989	落窪物語	—	2	7	—
1002	枕草子	3	4	2	1
1008	源氏物語	42	19	51	27
1059	更級日記	2	5	9	4
1050－1053	浜松中納言物語	9	20	12	16
1050－1053	夜の寝覚	2	38	10	7
1058－1092	狭衣物語	6	36	20	1
1092	栄花物語	14	32	45	8
1120	大鏡	1	3	9	1

表 1. 中古における「かげ」の意味分類

3　中世の「かげ」

中世の「かげ」には中古と同様に、「木・岩のかげ」「姿」「光」「庇護」の意味が見られる。ただし、「庇護」を表す「かげ」は十数例散見される程度に留まり、その多くは「木・岩のかげ」「姿」「光」を表すものである。

---

2 「庇護」の意味は「花や木のかげ」から派生したことについて、吉田（1997）も類似の意見を出している。詳細は吉田（1997）p.64～68 を参照。

3 表 1 において、「花や木のかげ」と「山や岩のかげ」の用例数を一括して、「木・岩などのかげ」にまとめる。

用例（5）が示すように、「頼むかげ」（または「かげを頼む」（5）a、b、d）や「かげにて過ぐす」（5e）といった表現から、中世の「庇護」を表す「かげ」は中古と同じ様相を呈していることが分かる。

（5）a　官（つかさ）・位に思（ひ）をかけ、主君のかげを頼むほどの人は、一日なりとも疾く移ろはむとはげみ、時を失ひ世に余されて期する所なきものは、愁へながら止まり居り。（方丈記・1212 年・27）

b　皇胤（くわういん）ノ貴種（きしゅ）ヨリ出（いで）ヌル人、蔭ヲタノミ、イト才ナンドモナク、アマサヘ人ニヲゴリ、モノニ慢ズル心モアルベキニヤ。（神皇正統記・1339 年・134）

c　父に幼少よりおくれ、したしき者は、身貧に候へば、目もかけず、母ならずして、誰かあはれみ給ふべきに、か様に御心つよくましませば、立よる蔭もなきまゝに、乞食とならん事、不便におぼえ候ぞや。（曾我物語・1285 年以前・282）

d　道ニテ思ノ外ノ事アラバ、ソコニテコソ共ニ兎モ角モ成ハテメ。憑（タノ）ム陰ナキ木ノ下ニ、世ヲ秋風ノ露ノ間モ、被（レ）ステオカ棄置マ進ラセテハ、ナガラウベキ心地モセズ。（太平記・1375 年・302）

e　昔の内侍のかんの殿、〔近比〕院號ありて萬秋門院ときこゆるも、故院の御かげにてのみ過ぐし給へれば、より所なくあはれげ也。（増鏡・1333～76 年・428）

このほかに、中世の「かげ」は「物・物事の裏」という新たな意味用法が派生する。この意味に用いられる「かげ」は主に軍記物語と中世末期のキリシタン資料に現れる。たとえば、（6）a～c の軍記物語においては「かげ」は楯、障子、鰭板といった実物の後ろの空間を指し、（6）d～f のキリシタン資料においては「かげ」は悪口やいたずらを指す。このように、具体的な物理の裏と抽象的な物事の裏、両方が表せる。

（6）a　是モ城中ニ名誉ノ精兵共多カリケレバ、走廻テ射ケルニ、多ク物具ヲ被レ徹テ叶ハジトヤ思ヒケン、皆持楯ノ陰ニ隠レテ、「惡手替レ。」トゾ招キケル。（太平記巻十五・108）

b　やゝ有りて年頃十八九ばかりなる女の童の優なるが、一間お障子の陰より「何事候ぞ」と申しければ、「京の者にて候が、當國の多胡と申すところへ人を尋ねて下り候が、この邊の案内知らず候。（義経記巻二・71）

c　衞門尉が宿坊と御前との間なる石橋のほとりに、徘徊しまちけれども、鰭板（はたいた）の陰に、郎等共たちかこみ、前後左右にありければ、それもかなはで、暁にお

よぶまで、心をつくしねらへども、すこしの隙なければ、いたづらに夜をあかす、心のうちぞ、無慙なる。（曾我物語・169）

d　酒宴の半に及うだ時、倉の役者戸を開いて来れば、京の鼠は元から住みなれたる所ぢゃによって、わが栖（すみか）をよう知って、たやすう隠れたれども、田舎の鼠は案内は知らず、ここかしこを逃げ廻ったが、とある物の陰に隠れて、辛（から）い命を生きて、その難をのがれた。（キリシタン版エソポのハブラス・42）

e　五・六度もそれとからかうて、直に悪口を吐き、蔭でも二・三度謗り、そのこと散々に沙汰とりなしまらして、終にそれから二月・三月の間にそれと言葉も交しまらせなんでござった。（コリヤードさんげろく・30・17）

f　まことになにたる威勢位のある人をも蔭でわいたづらものわそしらいでかなわぬものなれども、この清盛の世盛のほどわいささかゆるかせにも申す者もござなかった。（天草版平家物語・11・20）

この「物・物事の裏」の意味は「庇護」と同じように、「花や木のかげ」の意味から派生してきたと考えられる。つまり、「花や木のかげ」に隠れることは、一方では身を守るという意味で「庇護」の意味が派生し、他方では外から見えないという意味で「物・物事の裏」という意味が派生すると理解できる。ここで、「物・物事の裏」の意味を加えて、中世における「かげ」の意義ごとの用例数を次頁の表 2 に示す。

さらに時代が下って、狂言の用例において「恩恵」の意味を表す「かげ」が見られる。そもそも「恩恵」の意味が「庇護」の意味と近い関係にあると考えられる。「庇護」という意味の背景に庇護を与える側と受ける側が存在し、庇護することに伴い与える側と受ける側の間に恩恵のニュアンスがおのずから生じる[4]。中古の用例で述べた貴人の庇護のもとで暮らすといったものについて、庇護を受けること自体は恩恵を受けることになる。且つ、貴人・親の庇護を受けて暮らすという意味の背景には、庇護する側から長期的な配慮と具体的な“庇護”行為を伴うことが想定できる。ところが、中世末期の狂言の用例においては、そのような長期的な配慮または具体的な“庇護”行為は見られない。

（7）a　太郎冠者「此やうなめでたひ事ハござるまひ」大名「何と殊勝（しゅしやう）な〔すぐれた〕事でハなひか、思ひの外はやうお暇を下され、仕合（しあはせ）のよひ〔幸運なこと〕もおかげじゃと思ふ、堂の様子を見おひて、国本にての物がたりにせう（虎明

4　物理的な行為と恩恵性の関係について、現代語の例でも見られる。
a　太郎は花子に絵本をあげた。
b　太郎は花子に絵本を読んであげた。
　a は単純に「絵本をあげる」という物理的な行為として捉えられるが、b は「読む」行為を通して、太郎が花子に恩恵を与えることが読み取られる。

本狂言・大名狂言類・189）

b　シテ「正月の、おしまいは、なされたかと云」アト「とう、しまふたと云」シテ「いつも、よそから、年取り物を、御合力ある方から、まだ貰いまらせぬと云」アト「誠に、忘れたと云て、はや蔵を納めた、春永にやらうと云」シテ「お蔭で、子共に、正月がさせたう御ざると云。（天理本狂言・米市・565）

（7）a は大名が太郎冠者と因幡堂を通りかかる際に、「幸運なことすべては因幡堂の薬師如来のおかげだ」と言い、お参りしようという場面である。この文において、「おかげ」の背景に具体的な“庇護”行為がなく、大名にとって薬師如来のおかげはメンタル

	成立年代	作品名	木・岩などのかげ	光	姿	庇護	物・物事の裏
軍記物語・説話集・随筆	12C初	今昔物語集	7	9	16	2	1
	1172	建礼門院右京大夫集	—	6	—	—	—
	1212	方丈記	—	1	—	1	—
	1219	保元物語	2	4	2	—	—
	鎌倉前期	平治物語	4	0	2	—	2
	1221	宇治拾遺物語	6	4	9	—	—
	13C	平家物語	11	14	6	—	4
	1231－1253	正法眼蔵	—	—	4	—	—
	1254	古今著聞集	5	11	23	2	—
	1283	沙石集	—	2	5	1	—
	1285年以前	曾我物語	7	9	8	1	2
	1330	徒然草	1	3	4	—	—
	1339	神皇正統記	—	1	1	1	—
	室町中期	義経記	5	4	8	—	4
	1368－75	太平記	67	13	36	7	20
	1376	増鏡	8	12	8	2	—
	1448－50	正徹物語	2	4	—	—	2
抄物	1475年以前	論語抄	4	—	—	—	1
	1480	史記抄	1	2	1	—	—
	1504	湯山聯句抄	1	2	1	—	—
	1533年以前	中華若木詩抄	1	—	7	—	—
	16C	句双紙抄	—	1	2	—	—
	16C後半	中興禅林風月集抄	3	—	4	—	—
キリシタン資料	1592	どちりなきりしたん	1	—	1	—	—
	1592	天草版平家物語	4	—	—	—	1
	1593	エソポのハブラス	—	—	2	—	2
	1593	伊曾保物語	—	—	3	—	—
	1593	金句集	—	—	1	—	1
	1596	コンテムツスームンヂ	—	1	—	—	—
	1632	コリャード懺悔録	—	—	—	—	2
狂言	1642	虎明本狂言	6	1	20	3	4
	1644-1648	天理本狂言	2	—	14	2	10

表 2.　中世における「かげ」の意味分類[5]

[5] 『虎明本狂言』と『天理本狂言』について、「庇護」の意味の欄は正確に言うと、後述する「恩恵」

的な恩恵の意味だと考えられる。このような「仏のおかげ」などは近世において一般的見られるようになる[6]。(7) b はシテ（所の者）がアト（有徳人）から米をもらい、御礼を述べる場面である。この場合、「おかげ」は中古のような長期的な配慮がなく、一回性の出来事に関して現れた恩恵だと見られる。次節で見る近世の「おかげ」が表す「恩恵」は殆どこのような一回性の出来事に関するものである（用例（8）を参照）。

ここまでに至って「かげ」の意味変化をまとめると、中古において「木や花のかげ」から「庇護」の意味が派生し、「恩恵」のニュアンスがおのずから生じる。中世末期になると「庇護」の意味に伴う長期的な配慮や具体的な庇護行為が見えなくなり、一回性の出来事に関わる「恩恵」の意味特徴が確立する。

4　近世の「おかげ」と「おかげさま」

近世の「かげ」は依然として「木などのかげ」「光」「姿」「物・物事の裏」の意味用法を持つ。ただし、従来の「庇護」の意味を表す「かげ」が見られなくなり、中世末期で見た「恩恵」の意味を表す「かげ」が多く見られる。以下、近世の「かげ」を意味ごとに分類し、表 3 にまとめる。

時期	資料		意味				
			木などのかげ	光	姿	物・物事の裏	恩恵
前期上方語	仮名草子		9	8	19	1	—
	浮世草子		38	27	52	14	14
	浄瑠璃	世話物	16	31	35	19	19
		時代物	51	39	51	12	12
後期上方語	浄瑠璃	世話物	2	1	5	1	1
		時代物	14	8	9	2	4
	歌舞伎		5	4	8	3	12
後期江戸語	歌舞伎		8	6	8	18	9
	噺本		1	—	—	4	2
	黄表紙		2	2	1	1	2
	洒落本		—	1	1	2	2
	滑稽本		5	5	7	11	22
	人情本		—	5	8	7	16

表 3. 近世における「かげ」の意味分類

を表す欄となる。

[6] 近世において、「仏のおかげ」といった用例は次のようなものがある。

a 精進の事は忘れて、鰯の頭も信心からとて、墨染の麻衣を着るゆゑに、この十四五年も仏のお蔭にて、毎朝修行に出しに、一町にて二所づつの手の中、二十所を集めて漸一合あり。（〔浮〕世間胸算用・1692・351）

b ハアヽ有難い忝い如來のお蔭直に又。道場へ參りて御開山へお禮申さう。（〔浄〕冥土の飛脚・1711・187）

4.1　「恩恵」の意味特徴の拡張

中世末期において、「恩恵」は「おかげ」[7]の意味特徴として確立し、近世に入ってさらに拡張する様相が見られる。この意味特徴の拡張は「おかげ」が表す恩恵関係の変化に反映される。中古の恩恵関係は貴人や身分の高い人から庇護を受けることに限られるが、近世では「仏のおかげ」といったメンタル的な恩恵関係（注釈 4 を参照）、もしくは「親旦那」「婿」「親仁」といった身近の人間同士の間に生じた恩恵関係（用例（8）を参照）が多く見られる。「おかげ」はこういった恩恵関係に広く用いられる。メンタル的でも一回性的でも恩恵関係が存在する場合であれば「おかげ」が使われることは、「恩恵」の意味特徴が拡張していると考えられるだろう。

（8）a　この新七めが親は、大和の貧乏人、幼少の時、藤田小平次と申した、狂言役者へ、奉公やら養子やらに参つて、女形をいたしたを、親旦那のお陰で、お家へ参り、手代並になされしが、さすが育ちが恥づかしい。（〔浄〕淀鯉出世滝徳・1708・72）

b　そこへ見えるそり下げは、昔は大貧乏、年貢に詰つて、娘を京の島原へ売り、大尽に請け出され奥様にそなはり、婿の蔭で田も五町、蔵も二ケ所の分限者。（〔浄〕冥途の飛脚・1711・146）

c　親仁様の蔭でこそ、親子三人、橋にも寝ず、人の門にも立たず、名跡立ててくだされた。（〔浄〕女殺油地獄・1721・227）

d　二年といふもの巣守（すもり）〔空閨を守る〕にしてやう／＼母様伯父様のお蔭で、むつまじい女夫（めをと）らしい寐物語もせうものと。（〔浄〕心中天の網島・1720・372）

この恩恵関係の変化は「かげ」の意味変化によってもたらされた結果だと考えられる。つまり、「かげ」は「庇護」の意味を表す際に、身分の上位の人から下位の人を庇護するため、庇護の与える側と受ける側の間に絶対的な上下関係が存在すると想定できる。しかし、「恩恵」の場合は庇護の“能力”を要求しないため、恩恵の与え手と受け手の間に上下関係がなくてもよい。その結果、「おかげ」は恩恵関係が存在する場合に広く用いられる。さらに、次の用例（9）が示すように、恩恵の与え手の位置に人間ではなく物や出来事（節）が来ることもある（破線で示す）。

---

7 近世において、「恩恵」を表す場合「お」が付くことが多いため、以下近世の用例を述べる際に「おかげ」の形で呼ぶことにする。

(9) a　きのふも申す通り、こなたは乳ぶくろもよいによつて、がらりに八十五匁、四度の御仕着せまで。かたじけない事とおもはしやれ。雲つくやうな食たきが、布まで織りまして、半季が三十二匁、何事も乳の蔭ぢや〔乳のため〕と思はしやれ。(〔浮〕世間胸算用・1692・411)

b　蛭巻よりかつしと斬つてぞ落しける、もの／＼しやと、腕の力碁盤片手に振り上げて、こりや我はもとより武士ならず、鑓〔槍〕持つ術は知らねども、鼓のお蔭で〔鼓のため〕打つこと覚えた。(〔浄〕堀川波鼓・1707・526)

c　中にも、源五物功者(ものごうしゃ)〔物慣れた者〕。騒ぐまい、騒ぐまい、渡り奉公した御蔭〔私があちこち奉公したため〕、我たしだいに遊ばせ、私が家にゐぬばかり、なんの気遣ひないことと、(〔浄〕薩摩歌・1704・292)

d　看板も出てはをりませんが、能く人のしつてるお薬さ。逆上ないで至極よいくすりでございます。あのお薬のお蔭で〔あの薬のため〕大分よい人がございますから、方／゛＼へ教て上ます。(〔滑〕浮世風呂・1809・120)

用例 (9) において、a は「乳のおかげ」、b は「鼓のおかげ」、c は「あちこち奉公したおかげ」、d は「薬のおかげ」ということで、いずれも物や出来事から恩恵を受けることになる。この場合、「おかげ」は当然「庇護」ではなく「恩恵」の意味だと捉えるべきである。また、この場合では「おかげ」の前後の出来事の間に因果関係が読み取られる。たとえば、(9) a においては「乳ぶくろがよい」ことが原因で、「即座に八十五匁、四度の御仕着せをいただくなどの」出来事が結果であり、(9) b においては「鼓の胴を握る作法が分かる」ことが原因で、「槍の打ち方を覚えた」ことが結果である。その他も同様に考えられる。

「おかげ」の構文から読み取られた因果関係は新たに派生したものではなく、従来の恩恵関係に関連する。つまり、中古の「庇護」を表す用例において、「貴人の庇護のもとで暮らす」ということは、一方では恩恵のニュアンスが生じることを前述したが、他方では「貴人の庇護を受けるため生活する」のように因果関係の解釈もできると考えられる。ただし、庇護や恩恵の与え手は人間である場合はこの因果関係が読み取られにくい。これに対して、恩恵の与え手の位置に物や出来事が現れると、それを後件事態の原因に捉えやすい。

以上、恩恵関係の変化から、近世の「おかげ」が示す「恩恵」の意味特徴が拡張することをみてきた。なお、「花や木のかげ」の意味から「庇護」の意味が派生し、さらに「恩恵」の意味が確立する過程において、「かげ」は物理的なものを指す意味から抽象的な意味へ転じ、すなわち自立語から機能語へ発展していく。これに伴い (9) b、d のような「おかげで」の形が次第に定着し、現代語へ繋がっていくと見られる。

4.2　“挨拶的”な「おかげ」と“皮肉的”な「おかげ」

近世では、「おかげ」は恩恵関係の拡張のほか、次のように直接ではなく間接的な恩恵関係の場合に用いられることが見られる。

（10）a　伯父「ようよう小(お)やみになってござる。さらばこのうちに戻ろう。」脇座へ出て「申し、茶屋殿、かたじけのうござる。おかげで雪も小(お)やみになってござる。（小名狂言・389）

b　新発意「さらば、また愚僧が酌に立ちましょう」花見の者甲「さてさて、今日は、おかげでよい花見を致すことでござる」（出家座頭狂言・302）

（10）a は話し手が茶屋で休憩しているうちに、雪が小降りになったことを「茶屋殿のおかげ」だと発話した場面であり、（10）b は話し手が僧に「酌をしてくれたことのおかげで、よい花見をした」と発話した場面である。この二文において「雪が小降りになった」ことや「よい花見がした」ことは、用例（9）のように直接に相手からの恩恵だと考えにくい。ここでは、雪が小降りになるまでの間に茶屋で休憩してもらうこと、花見をより楽しむために酌をしてくれたことに対して、話し手が相手に感謝の意を示すために「おかげ」を用いる。すなわち、「おかげ」には他人から受けた親切や助力に対して感謝の意が込められていると捉えられる。現代語になると、この意味がさらに発達して、恩恵関係が全く存在しない場合でも「おかげ」は用いられる。

（11）（お見舞いの人に対して）「おかげさまで、息子のけがはだいぶ良くなりました。」
（（2）b 再掲）

用例（11）の「おかげさま」は相手の親切に対して感謝の意を示す。この場合、「おかげ」は恩恵を示すことより、コミュニケーションを円滑に行うために用いられたと考えられる。すなわち、現代語の「おかげ」は“挨拶的”な側面を持つと見られる。この側面は用例（10）のようなものから受け継いたと考えられる。

また、現代語では望ましくない事態の原因・理由に「おかげ」が皮肉的に用いられることを冒頭で述べた。この“皮肉的”な「おかげ」も近世後期江戸語に見られ始める。

（12）a　わたしらはぬしのおかげで、くらいうちから、冷へかたまりいしたは。（〔洒〕錦之裏・1791・422）

b　ひよこ／＼をどつて腹に入る。ヨリヤおかげでわつちは腹が減る。（〔滑〕

浮世風呂・1809−13・307）

c　手めへのおかげで、まだ足がひよろ／＼する（〔滑〕東海道中膝栗毛・1802−14・241）

d　サアはやく呑で切あげねへな。おらア今日はおめへのお蔭で酒が裏に落ていけねへ。（〔人〕春色梅児誉美・1832・101）

用例（12）において、本来「せい」が用いられると想定されるところに「おかげで」が使われる。たとえば、（12）a は「わたしたちはあなたのせいで、暗いうちから冷え固まっている」、（12）b は「あなたのせいで、わたしはお腹が空く」ということである。このように、「せいで」より「恩恵」を表す「おかげで」を用いることで、期待される望ましい結果が実現できず、逆に望ましくない結果になってしまったことが一層引き立てられる効果がある。

以上、現代語「おかげ」の“挨拶的”“皮肉的”な用法は近世においてすでに見られることを述べた。このような用い方が現れたのは、「おかげ」の恩恵の意味特徴が低下したからであろう。つまり、「貴人の恩恵を受けて暮らす」ことを表す中古の「かげ」は恩恵が大きいであることを言うまでもないが、近世の「おかげ」は広く用いられることにつれて、恩恵の意味特徴が拡張する反面、恩恵の度合が低下したということであろう。

4.3　「おかげさま」

現代語において、「おかげ」の他に「おかげさま」の表現もある。ただし、「おかげさま」は接続助詞的用法と述語用法がなく、もっぱら“挨拶的”に用いられる。「おかげさま」の用例は近世後期の江戸語において見られる。前節で「おかげ」が恩恵の意味から挨拶的に用いられることを述べた。「おかげさま」にも同じ傾向がある。以下、それについて少し検討を加える。

（13）a　最う毎度お宿さまのお道具を御拝借いたしまして、おかげさまでお性灵さまの御馳走か出來ますハイ／＼。〔はい→やみ吉〕（〔滑〕浮世風呂・1809−1813・290）

b　一昨日は御深切さまに娘をおさそひ下さりまして、ヤモおかげさまで。ハイ／＼。大だのしみをいたしたと申て御吹聴申ました。〔はい→やみ吉〕（〔滑〕浮世風呂・1809−1813・290）

c　はい「わたくし抔はお得意様のお蔭様で、まづナ、おまへさん、他人様のお足をも歩せ申さず。ハイ／＼。（中略）」やみ吉「それは何より能うございますネ」はい「イエハヤ、是と申スも御先祖さまのお蔭様でござりまして。ハ

イ／＼。おありがたい事でござります」（〔滑〕浮世風呂・1809−1813・290）

d「御尤も様で御坐い升けれども、私共夫婦の者ハ、萩原様の御蔭さまで漸（ようや）く其日を送て居る者で御座い升から、荻原様の御体に、萬一（もしも）の事が御座いましてハ私共夫婦のものが跡で暮し方に困りますから、どうぞ跡で暮しに困らない様に百両の金を持て來て下さいましたらバ直（すぐ）に剝しませう。〔伴→女の幽霊〕（怪談牡丹燈籠・1861−1864・33）

用例（13）において、「おかげさま」は何も付かない単独の形と「御先祖さまのお陰様」「萩原様のお蔭様」のように明示した形で用いられている。この違いは恩恵の与え手が眼前にいるか否かによるものだと考えられる。（13）a、b においては、恩恵の与え手（やみ吉）が眼前にいるため特に明示する必要はないが、（13）c、d においては、恩恵の与え手（御先祖様、萩原様）が眼前の人と同一人物ではないため、「〜のおかげさま」と明示しなければならない。いずれにせよ、これらの「おかげさま」は恩恵関係を示す。たとえば、（13）a は「（やみ吉の）おかげでお性灵さまの御馳走ができる」ということであり、（13）b は「（やみ吉の）おかげで娘が大いに楽しんだと言った」ということである。

ところが、現代語の「おかげさま」は基本的に次のように恩恵の与え手が眼前の人である場合にしか用いられない。

（14）a　上州生れで、繭のように肥った彼女は、急な裏梯子から信玄袋をかついで二階の女給部屋に上って行った。「お蔭様でありがとうございます。」暗がりにうずくまっている女の首が太く白く見えた。（林芙美子『放浪記』1930）

b　「仙さんも閉じこもりの調べものじゃ、まず家内安全ですね。」「なんですか、お陰さまでちかごろは……ときに今日はお手数をかけましておそれいります。」（石川淳「葦手」『焼跡のイエス・処女懐胎』1946）

この二文において、「おかげさま」はいずれも眼前の人に対して用いられ、それに挨拶的に用いられる側面があると見られる。そもそも挨拶的な表現は対話の場面（「こんにちは」のように眼前の人）に使われるため、現代語の「おかげさま」は目の前の人にしか用いられないのはこれが原因だと考えられる。

ちなみに、「おかげさま」は目の前の人にしか使わないと、その相手が誰であるかは確定できる。従って、現代語は近世語のように「〜のおかげさま」と明示しなくてもよい。また、挨拶表現としての用法が定着し、「おかげさま」には接続助詞的用法と述語用法がないと考えられる。

以上、近世後期と現代語の用い方を見比べると、「おかげさま」は単に恩恵を表すこと

から挨拶表現的に用いられるようになったことが分かる。なぜ「おかげ」に比べ、「おかげさま」のほうが挨拶表現専用の形式に変わったのか、その理由は「さま」に求められそうである。一般的に「さま」は丁寧さを示すために付けられるものだと考えられるが、次は同じく近世後期に見られる「御苦労さま」の用例を通して確認する。

まず、「御苦労」という表現は現代語では通常目上から目下に使われる言葉であるが、しかし、倉持（2011）（2013）の指摘の通り、近世後期では「御苦労」は「目上にも目下にも仲間内にも」用いられてきた。以下、その用例を幾つか掲げる。

【御苦労】

（15）a 「箱屋の九蔵、今のさきに掛乞と云分いたされまして、首しめて死なれましてござる。夜半過ぎに、葬礼いたします。御苦労ながら、野墓へ御出たのみます」というて来る。（女→亭坊）（〔浮〕世間胸算用・1692・468）〔女→亭坊、下→上の関係〕

b 組下の二番ばえ、金田甚蔵、岡軍右衛門、大橋逸平、うち揃うたる血気盛り、立て掛け、のんこの頭がち、裾はお留守のかつて見廻、いづれも御苦労、御苦労、今日お鷹野よりすぐお腰掛けらるゝとな、急なお成りでさぞ取り込み、お料理組もう出来たか、早し／＼（〔浄〕心中宵庚申・1722・436）〔鷹狩りの仲間、対等の関係〕

c 「駕籠でおもひ出したが、先へ行く駕籠を乗越す時は「若い衆御苦労、と詞をかけて乗越すの」」（〔滑〕浮世床・1813・286）〔駕籠に乗る人→駕籠を担ぐ人、上→下の関係〕

用例（15）において、「御苦労」はそれぞれ女の人が住職に、鷹狩の仲間同士、駕籠に乗る人が担ぐ人に発話する場面に用いられている。このように、「御苦労」は目上から目下に限らず、目下から目上または対等関係にも使われる。つまり、近世では「御苦労」は一般的に相手への労いの気持ちを込めた表現だと見られる。一方、近世後期の「御苦労さま」の用例はすべて目下から目上に用いられる。

【御苦労さま】

（16）a〔庄屋〕イヤ／＼、そふでない。此様に風が吹けば、此方も随分精に入て廻らねバならぬ。〔下役人〕コレハ／＼大きに御苦労様。イヤ申、五介さん。旦那様が御出なされた。丁代五介飛で出、コレハ／＼旦那様。お勝なされぬに御苦労様。只今私が廻りましてござり升。」（〔噺〕曲雑話・1800・297）

b 秘蔵娘が頓死して、そうれいを出す所へ、だんなでらのおしゃう、弟子衆ひ

きつて、ずつとはいる。これハ／＼御苦労さま。まづおとふりなされませ。ソレお茶、おたばこぼんと、親類中があいさつする内、親父、目をなきはらして立出、（親類→和尚）（〔噺〕笑府商内上手・1804・173）

c　武家の使と見へたる男「ハイチトおたのみ申（し）ます。梶原のやしきから参りました。蝶吉さんの迎ひでござります」くま「ハイ／＼これはモウ大きに御苦労さま。サアヨ蝶吉、はやく支度をしねへか。」（〔人〕春色梅児誉美・1832－1833・133）

d　表「おむかひに参りました。モウ三番仕まひましてござり升。御苦労さまながら、御這入下されませ。もふおはやしも場所へ這入てゞムり升」福「そふか。いかざなるまいと、」（〔噺〕落噺千里藪・1841・136）

（16）a は夜風が激しく吹く冬の夜に、防災のために廻る最中の村役人庄屋に対して、下役人が「御苦労さま」と言い、自分たちが廻るから庄屋は休むようにと発話した場面で、（16）b は娘を亡くなった家にお経を唱えにくるお坊さんとその弟子に対して、親類が「御苦労さま」と挨拶した場面である。他も同様に、話し手と聞き手の間に身分の上下差があり、「御苦労さま」はもっぱら目下から目上に対して使われている。

ちなみに、（16）a の続きの部分では「庄屋」は下役人に対して「大儀」という言葉を使っている[8]。この違いから近世後期では目上が目下に「大儀」、目下が目上に「御苦労さま」を用いるという使い分けがあるように思われる。しかし、現代語では「御苦労さま」は一般的に目上から目下を労う言葉である。この変化について、倉持（2011）（2013）では明治期に入って武士階級は部下に労う言葉「大儀」が消滅し、代わりに「御苦労」系が目上から目下へ用いられるようになったと説明している。

以上、近世において「御苦労」は身分に関係なく広く用いられるのに対して、「御苦労さま」はもっぱら目下から目上に用いられることを確認した。この違いから下層の人は上層の人に対して丁寧な言葉を使わなければならないため、「さま」が付けられたと実例を通して論証した。「おかげさま」も同様に考えられる。つまり、「おかげ」より「おかげさま」のほうがより丁寧であるため、挨拶表現として定着したのであろう。

5　おわりに

本稿では、原因・理由を表す「おかげで」の意味用法の成立及び展開について考察を

8　（16）a の続きの部分は以下のように引用する。
・〔庄屋〕ムヽ、それハ近頃大義でござる。有様ハおれも今夜ハ休ミたい。もし風もやまずバ、又あすのばんにも廻ふ。

行った。考察の結果、以下のことが明らかになった。

（一）「恩恵」の意味特徴の派生

中古の「かげ」には「庇護」の意味が見られる。この意味は「花や木のかげ」の意味から派生してきたと考えられる。つまり、「花や木のかげ」に隠れることは貴人の「庇護」を受けることに喩えられ、よって「庇護」を表す用例では「御蔭に隠れる」という表現が多いのである。中世末期になると、「庇護」の意味に伴う具体的な“庇護”行為と長期的な配慮がなくなり、一回性の出来事に限る「恩恵」の意味が「おかげ」の新たな意味特徴として確立する。

（二）「恩恵」の意味特徴の変化

近世に入ると、「恩恵」の意味特徴がさらに拡張し、恩恵の与え手の位置に物や出来事が現れるといった変化が見られる。この場合、その出来事が後件事態の成立する原因・理由として捉えられる。一方、「恩恵」の意味特徴の度合も低下するように見られ、それに伴い近世後期から“挨拶的”“皮肉的”な「おかげ」が現れる。さらに、「おかげさま」の表現についても考察し、近世後期と現代語の使用状況を見比べた結果、「おかげさま」は挨拶表現に変わったことを述べた。

〔調査資料〕

《上代・中古》万葉集・枕草子・源氏物語『新編日本古典文学全集』（小学館）土佐日記・大和物語・伊勢物語・蜻蛉日記・落窪物語・更級日記・狭衣物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・栄花物語・大鏡『日本古典文学大系』（岩波書店）《中世》今昔物語集・建礼門院右京大夫集・方丈記・保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・平家物語・正法眼蔵随聞記・沙石集・古今著聞集・徒然草・新皇正統記・曽我物語・義経記・太平記・増鏡・正徹物語『日本古典文学大系』〔抄物〕坂詰力治（1984－1987）『論語抄の国語学的研究』武蔵野書院、来田隆（1991）『句双紙抄総索引』清文堂、来田隆（1997）『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂、大塚光信他（1959）『六物図抄並解説・索引』非売品、福島邦道（1983）『中華若木詩抄』笠間書院、大塚光信他（1971）「中興禅林風月集抄」『新抄物資料集成第一巻』清文堂、鈴木博（1972）『周易抄の国語学的研究』清文堂、岡見正雄他（1971）「史記抄」『抄物資料集成第一巻』清文堂〔キリシタン資料〕大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハブラス本文と総索引　本文篇』清文堂、江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本及び総索引』明治書院、大塚光信（1985）『コリャードさんげろく私注』明文堂、小島幸枝（1971）『どちりなきりしたん総索引』風間書房、新村出・柊源一（1957）「こんてむつすむん地」『吉利支丹文学集　上』朝日新聞社、金田弘（1969）『天草版金句集本文と総索引』白帝社〔狂言〕大塚光信（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』（上・下）清文堂出版、北原保雄・小林賢次（1991）『狂言六義全注』勉誠出版《近世》【前期上方語】〔仮名草子〕恨の介・竹齋・伊勢物語など『日本古典文学大系仮名草子集』〔浮世草子〕好色万金丹・傾城禁短気『日本古典文学大系浮世草子集』、『日本古典文学大系西鶴集上下』の所収作品すべて〔浄瑠璃〕『日本古典文学大系近松浄瑠璃集』の所収作品すべて、八百屋お七・ひらかな盛衰記・夏祭浪花鑑など『日本古典文学大系浄瑠璃

集』【後期上方語】〔浄瑠璃〕一谷嫩軍記・妹背山婦女庭訓など『日本古典文学大系文楽浄瑠璃集』〔歌舞伎〕幼稚子敵討・名歌徳三舛玉垣・韓人漢文手管始『日本古典文学大系歌舞伎脚本集』(上・下)【後期江戸語】〔歌舞伎〕お染久松色読販・小袖曽我薊色縫『日本古典文学大系歌舞伎脚本集』(上・下)〔噺本〕無事志有意・聞上手など『日本古典文学大系江戸笑話集』〔黄表紙〕〔洒落本〕『日本古典文学大系黄表紙洒落本集』所収作品〔滑稽本〕東海道膝栗毛・浮世風呂『日本古典文学大系』、浮世床『新編日本古典文学全集』〔人情本〕春色梅児誉美・春色辰巳園『日本古典文学大系』《近代》〔速記〕怪談牡丹燈籠(筑摩書房)《現代語》〔新潮文庫〕CD－ROM 新潮文庫 100 冊。以上、『日本古典文学大系』は国文学研究資料館のデータベースによる。

〔参考文献〕

吉田比呂子(1997)『「カゲ」の語史的研究』和泉書院

三浦　佑子 (2007)「複文における複合接続助詞の機能―「せいで」・「おかげで」について―」『言語科学論集 』11 (東北大学大学院文学研究科言語科学専攻) pp.35-46

倉持　益子(2011)「労い言葉「ご苦労」の変遷とその変化の要因」『言語と交流』14 (言語と交流研究会) pp.77-89

倉持　益子(2013)「あいさつ言葉の変化 」『明海日本語』18 増刊号(明海大学日本語学会) pp.259-284

境　希里子 (2014)「「おかげで」と「せい」について―用例分析を中心に―」『文化学園大学紀要人文・社会科学研究』22 (文化学園大学) pp.69-82

馬　紹華(2017)「原因・理由を表す「せい」の成立について」『訓点語と訓点資料』138(2017 年 3 月末刊行予定)

(ま　しょうか　大学院人文社会系研究科　博士課程３年)